James Murdoch と若き日の私

岡　田　六　男

私は二十代の大半を豪州で，ほとんど無為に暮してしまって，いわゆる豪州ぼけになり，第二次世界戦争後しばらくの間は，戦争ぼけ，今はそろそろ本格的にぼけ始めている。そんな私が英語を習い始めたのは今からかれこれ半世期も前の話で，明治が終って大正にかかった 1921 年の頃だった。鹿児島県立第一中学校に入学した時からである。当時の中学校は今でいう新制中学と高校を合せたようなもので五年制だった。その頃日本はすでに海軍国として知られ，鹿児島は東郷元帥（げんすい）をはじめ，錚々たる海軍軍人の出身地として有名だった。したがって一中は，海軍兵学校を志望する秀才が少なくなかった。地方の中学校としては兵学校への入学卒も高い方だった。私は身体も余りよくないし，頭もいい方でなかったので，むろん軍人向きではなかった。

その頃一中には優秀な先生もかなりいたようだ。英語ではまず安藤貫一という地方の学校にはもったいないような先生がいた。彼は島津公のお供をして，外国を廻ってきた関係で一時一中に奉職していたらしい。私が入学して間もなくよそへ栄転されたので，ついに教えて貰えなかったが，上級生の話では，彼はちゃやきちゃきの江戸っ子で，すばらしい実力の持主だったということだ。丁度私が入学した頃米国人が教師として就任して来て，就任の挨拶をペラペラ話したが，一年生の私などにはちんぷんかんで，さっぱり分らなかった。ただ一語だけ You Satsuma boys というのが分ったような気がした。安藤先生がそれを「諸君，薩摩隻人（さつまはやと）」と通訳されたが，うまいものだなと感心したことだけを覚えている。もしあんな先生に二年か三年間習っていたら，少なくとも英語だけは，さぞ上

手になったことだろう。彼は研究社発行の和英大辞典や活用大辞典の編者として有名な故勝俣先生や米国で英文記者として大活躍したK. K. Kawakami などと一所に東京は神田の国民英学会で勉強した秀才であった。漱石の「吾輩は猫である」や菊地寛の「恩讐の彼方」(Onshū no Kanata),「俊寛」などいくつかの作品を英文に訳している。大阪の高商だったか外語だったかはっきり覚えていないが，そこに奉職中，二度目の渡英の際Isle of Wight で亡くなった。

私が中学四・五年の頃の英語の先生の一人は安藤栄二郎氏だった。前述の安藤貫一氏を国民英学会で教えた先輩だとか聞いた。井上十吉の辞典といえば当時有名な英語の字引だったが，その編さんを手伝った蘊蓄（うんちく）のある先生，謡に深い趣味を持っていた。丁度その頃東京の英語通信社の今井信行氏が編集した *English Weekly* という，一枚刷りの週刊紙が発行された。一部一銭かそこいらの今の学生には想像もつかないような安価な印刷物で，今日でいう学生向きの時事英語といったもののはじまりだった。安藤先生はこれを補習用として吾々に読ませた。お蔭で，なんとなく力がついたようだ。

私の一年下のクラスにすごい俊才がいた。数年前日本放送協会会長をつとめ，さき頃外務省の顧問として駐仏大使として活躍した古垣鉄郎氏がそれだった。彼は私が五年のとき，京城の中学から一中に転校してきたのだが，京城では安藤貫一先生に教わったとか聞いている。彼は一中在学中すでに，英・仏・独の三ヶ国語に堪能であった。

その頃も，今日と同じように，数学・英語・国語に重きが置かれていたが，英語を苦手とする連中が多かったことも今とさほど変っていなかった。私は他の生徒の多くが嫌がる英文法や英作文に人一倍力を入れて勉強しているうちに，少しずつ興味が湧いてきた。英語の教科書に出ている英文を和文英訳に応用することが役立つようだ。いつの間にか和文英訳よりむし

ろ自由作文に興味を覚えるようになった。当時は目から習う英語が主で，耳からの英語はほとんど学ばなかった。外人の教師はいるにはいたが，今日のように熱心にやる生徒は少なかった。私もその少ない中には入っていなかった。万国発音記号などがまだ採用されていな時代である。もちろんテレビやテープレコーダーは言うに及ばず，ラジオもまだ誕生していない頃の話である。だから英語の発音などは，いいかげんなもので，potatoesを先生の中には potatouz! などと，平気で発音する者さえいる程だった。東京や神戸のように外人の多い大都会と違って，地方の学校などでは発音に力を入れる先生は少なかった。

当時の中学がどんなに英語を勉強したといっても高が知れたものだ。しかも余り刺激のない地方においては尚更のことだ。しかし東京のような檜舞台を踏んだことのない私にも大都会でさえ容易に捕えられないような好機が訪れた。大正五年(1916)に一中を卒業した私は家に果樹園の経営を手伝っていた関係で，鹿児島の高等農林学校の入学試験を受けて見ようかと思っている矢先だった。私の義兄に当るスコットランド人ジェムス・マードック (James Murdoch) が駐日英国大使マクドナルド (Sir Claud MacDonald) の推薦で，豪州の首都カンベラ (Canberra) にある陸軍士官学校の日本語講師として赴任することになり，私も二・三年のうちに assistant として，連れて行くという約束をして貰った。そこで学校の方は見送って，渡豪準備の積りで勉強にとりかかった。このマードックについては後述するが，私は彼の留守中，彼の書斉に出入りを許されて，そこで手当り次第に色々の英書を繙いた。大英百科全書になじむようになったのもその頃だった。しかし何よりも先に日本関係の英語の本を読むことに興味を感じてマードックの蔵書を漁った。中でも一番役立ったのは Basil Hall Chamberlain の名著 *Things Japanese* (日本事物誌) だった。今でこそその内容は古臭くなってしまったが，その名文は愛読の価値が十分ある。ちなみに

今日外人間に広く読まれている故城谷黙氏の*Mock Joya's Things Japanese*はかつて私が城谷氏に suggest した標題である。同じく Chamberlain の *Handbook of Colloquiol Japanese* や *A Practical Introduction to the Study of Japanese Writing* (文字のしるべ) などに極めて有益だった。殊に後者は漢文の書き方から書簡文の書き方に至るまであらゆる部門にわたって詳細に説明した大著だが，進んだ日本語研究家の虎の巻だった。今ではもちろん old-fashioned で，むしろ珍本の部類に属するものだが，当時の私には非常に得る所があった。この本の中に出ていたことで一つだけ覚えているのをご紹介しよう。 彼は「船」という漢字を外人に教えるのに，Noah の ark (箱舟) に人が八人乗って洪水をのがれたという旧的聖書の話と結びつけている。すなわち「口」の字は「人口」の口で eight mouths は eight persons を意味するということで，彼はこれを *memoria technica* (記憶法) として参考にさせている。Lange の *Colloquial Japanese* はドイツ語から訳したものだが，いわゆるドイツ特有の徹底的研究の結晶というべき文法書だった。これは後に私が豪州で日本語を教えるようになった時の一つの textbook でもあった。その他の一般書では，Griffis の *The Mikado's Empire* や Mitford の *Tales of Old Japan* なども非常に参考になった。

とにかく私の中学卒業後の二・三年は外国で英語を学ぶ準備期間であった。 English-speaking country に行けば，その程度こそ違うが，余程の語学嫌いでない限り，誰でも英語の力がつくのは当然のことだという理由で，私の渡豪後のことは省略させて貰う。

さて前記のマードックのことだが，今日彼の名を知っているものは少ない。又彼の知己だった人，または彼に教えをうけた人で今存命している者も極めて少ない。その名は僅かに広辞苑や岩波の西洋人名辞典の旧版，研究社の英文学辞典などに出ているに過ぎない。読みものとしては，漱石全

集にも収めてある漱石がその昔朝日新聞に出した「博士問題とマードック先生と余」と「マードック先生の日本歴史」がある。又大正12年頃小宮豊隆氏が雑誌改造に漱石と子規の英作文に対するマードックの批評と訂正を比較した一文を寄せたことがある。これは昭和 38 年発行の昭和女子大学の近代文学研究叢書第20巻の中で能美・松本両女史が25頁位に，要領よく，まとめ上げたマードックと題する一章の中に取り上げられている。英文ではマードックの遺稿としてロンドンで出版された彼の日本歴史第三巻の冒頭に掲載されている短い伝記がある。これはマードックがシドニーの郊外で死去した時神戸の Japan Chronicle という英字新聞にその主筆 Robert Young が書いた記事を所々削除して掲載したものであるが，Sydney と Melbourne とをとり違えている。マードックを一番よく知っていたのは山県五十雄氏だった，彼は一高でマードックの愛弟子中の愛弟子だったが，マードックが日本歴史を著作するに当って大いて貢献するところがあった。彼はマードックのために「日本外史」その他の史料を何百頁も英訳して提供した。マードックに "Like Oliver Twist, I am asking for more" と次から次へと原稿を催促されるので，疲れ切って，鉛筆を耳に狭んだまま，机にもたれて寝てしまったことが幾晩もあったと，私に述懐されたことがある。彼はかつて「私の一生に最も影響を及ぼしたのは内村監三とマードックだった。物質面では損をしたかも知れないが，精神面では非常に得る所があった」という意味のことを話したことがある。彼が長い間交際したマードックについて書いた雑誌記事や小冊子も種々私の手もとにあったが‘戦争中に焼失してしまった。

マードックは 1856 年スコットランドの片田舎の一貧家に生まれた。11歳で小学校へ上ったとき，彼はまだ九々というものを知っていなかった。受持ちの先生が，まず最初のいくつかを暗記しなさいといって表を渡した。数時間の後「もう覚えたか」と尋ねられた時，彼は「まだです」と答えて

先生をがっかりさせた。やがてその日の放課になろうとする頃，少年マードックは先生に「やっと覚えました」といって，表を返しにきて九々を始めから九九八十一まででなく 12×12=144 まですらすらとやってのけた。先生はその非凡の記憶力にびっくり仰天したということだ。この辺の事情は，ゲラ刷のまま未発表に終ったマードックの自叙的小説に出ていたもので，私の手もとにあったが，これもまた戦争で焼けてしまった。とにかく彼は生涯このすばらしい記憶力を失わなかった。彼が豪州で急死した時，シドニー大学の英文学部主任教授はシドニー・モーニングヘラルド紙上に obituary notice（死亡記事）を寄せたが，その中で「マードックの記憶力はマコーレーのそれの如く retentive and ready だった」と述べた。この記憶力があったればこそ彼は五十歳頃から日本語を読む勉強をはじめて驚くべき進歩を遂げたのである。

私がマードックに下手な英語で話しかけるようになったのは私が中学五年を卒業してからである。私が中学五年の時書いた英語の自由作文を彼に見せたら，「中々よろしい，高等学校（旧制）の上級生もこの位書けるのは少ない」などとお世辞をいわれた頃のことである。彼はすでに 60 歳位だったが，漢字の画（かく）の順序を稽古していた。漢字を読むだけなら，外人にとって結果さえ同じなら，画（stroke）の順序などはどうでもよいわけだが，マードックは草書や行書を書く場合，順序を知る必要性があることを認識したのである。文字通り六十の手習いであった。彼は日本語を学ぶのに井上の英和と和英の外に，その頃新らしく出た武信（たけのぶ）和英辞典——これは今の研究社の和英大辞典の前身であった —— を使っていた。ことに武信和英は全頁にわたって赤鉛筆で横線を施して記憶していた。日本語の動詞 ——「勉強する」などのときのように「する」を伴う動詞は除いて——はどの位あるかを一々数えてギリシヤ語やラテン語の動詞と比較して覚えていたようだ。ある時何かの話から，私が「竜頭蛇尾」は英語で

どう表現したらよいですかと尋ねると，彼は即座に「あれを持ってきなさい」といって，大工に作らせた粗末ではあるが，極めて頑丈な本棚にのっている Century Dictionary の "R" のある volume を指したので，早速かかえて行くと，何もいわずに，"Rocket" のところをひろげて，用例としてそこに挙げてある Thomas Paine の "He rose like a rocket, he fell like the stick" を指摘した。彼がすでに武信辞典にあった go up like a rocket and come down like a stick を見て知っていたのか，有名な Paine の句を覚えていて急に思い出したかどうか，私にはわからなかった。またある時何処かの文の中で lotus-eater という表現を見たのでその意味を彼に質したところ，例の如く，Tennyson 全集を本棚から取らせて "Lotus-eater" を指摘して "Read this poem" といって差し出した。万事この調子だった。たいていの本は関係の passage の出てい頁を覚えていて，何の本の何頁といった風に，丁度吾々がよくかける電話番号でも覚えているかのように即座に出てきた。walking encyclopaedia とか walking library いうのがこんな人だなと思ったことがある。時には何十年前に読んだという本の頁まで記憶していたようだ。教科書などの頁を覚えておくと生徒に教えるとき便利だなと思って，後にマードックと共に渡豪して日本語を教えるようになったとき，私はこれを試して見たことがある。しかし無理して覚えた一夜漬けは，物覚えの良い人が自然に覚えたのとは大変な違いで，私などは結局猿真似にすぎないということを悟った。

話が前後するが，マードックは中等学校から給費生として当時スコッランドで一流の Aberdeen 大学に入学し，大英百科全書にもその名を残している有名なベイン (Alexander Bain 1818–1903) の門下生となり，同大学を最優秀の成績で卒業した。Aberdeen 大学といえば，その昔中国で宣教師として活躍する傍ら Chinese Classics (四書五経) を研究してその英文の全訳を完成した有名な Sinologist (シナ学者) James Legge (1815–

1897) の出身校でもあった。マードックは卒業後 Oxford やドイツの Göttingen やフランスの Sorbonne でも学んだ。ドイツでは Benfey の下でサンスクリットを学んだ。古典語と古典文学に精通し，24 歳ですでに母校 Aberdeen のギリシヤ語の助教授となったほどである。ロシア語以外の近代語もよくした。その後豪州で教育に従事したり，新聞記者生活をしたり，いわゆる checkered life を送ったのち，日本に渡ってきた。

来日後は第一高等学校，金沢高等学校（四高）東京の高商（商大の前身），鹿児島高等学校（七高）等で教鞭（べん）を執った。漱石などを教えたのは一高時代である。教育界への功労で叙勲のご沙汰があったが，マードックは勲章いただきに行く礼服がないという理由だけでなく，自分の教え子がそれぞれ有名になって社会で活躍しているのが生きた勲章だといって拝辞した。最近伝えられたように，ビートルズが勲章を貰うなんてけしからんといきり立って，MBE 勲章を返上しようと騒ぎ出した一部のイギリス人達の態度とはわけが違う。漱石が博士の称号を辞退した時，マードックは20余年の無音を破って漱石に手紙を送り「今回の件は君が moral backbone を持っていることになるからめでたい」といった意味のことを述べたそうだが，如何にも彼らしい。彼は身装に構わない，質素な生活に甘んじて，日本歴史の著作に没頭していたのだ。ことに鹿児島に居住している頃の彼は詩人 Wordsworth のいわゆる質素にして哲学的生活 (Plain living and high thinking) を地で行く隠れた学者であった。大正から昭和にかけて，日本で教科書として *Intellectual Life* と共に広く読まれた Philip Gilbert Hamerton の essay 集 *Human Intercourse* の中の "A Noble Bohemianism" (気高い自由放縦主義) という一章に出てくる人物を思わせる学者であった。この章に Bohemian であるひとりのドイツの学者と Bohemian とはおよそ縁遠いイギリスの一夫人の生活様式を比較した次のような一節がある。

It was a large room with a bed in one corner, and it was wholly destitute of anything resembling a carpet or a curtain. The remaining furniture consisted of two or three rush-bottomed chairs, one large cheap lounging chair, and two large plain tables. There were plenty of shelves (common deal, unpainted), and on them an immense litter of books in different languages, most of them in paper covers, and bought second-hand, but in readable editions. In the way of material luxury there was a pot of tobacco, and if a friend dropped in for an evening a jug of ale would make its appearance. My Bohemian was shabby in his dress, and unfashionable, but he had seen more, and passed more hours in intelligent conversation than many who considered themselves his superiors. The entire material side of life had been systematically neglected, in his case, in order that the intellectual side might flourish. It is hardly necessary to observe that any attempt at luxury or visible comfort, any conformity to fashion, would have been incompatible, on small means, with the intellectual existence that this German scholar enjoyed.

それは——このドイツ人の部屋——一角にベッドのある大きな部屋だった。カーペットとかカーテンとかいったようなものは皆無だった。他の家具といえば，灯心草で座部を張った二・三のいすと，大形の安っぽい長いす，それに大きい簡素なテーブルだった。・——　　——
は沢山あって，その下に数ケ国語の書籍が雑然とのせてあった，その多くは紙表紙の古で買ったものだが読み易い本だった。贅沢品といえば，入れ物にはいついいるパイプ・タバコ位のもので，もし夜分にでも来客があれば，一杯のビールが姿を見せる程度だった。彼の服装はみすぼらしく，しかもやぼで流行おくれだった。がしかし彼は彼よりえらいと自惚れている多くのやからより見聞も広く，読書や知的交際の範囲も広かった。彼の場合，知的面を豊かにするため生生活の物質面のすべてが故意に疎んじられていた。贅沢をしようとか，目に見えて楽な暮しをしようとか，流行を追うとかすることは，僅かばかりの収入では，このドイツの学者が楽しんでいる知的生活と，およそ調和しないものであったろう。

この描写の数ヶ所を書きかえれば，そのままマードックの場合にあてはまるような気がする。Bohemian マードックはこうした部屋を書斎兼応接間として使用していたが，ここに多くの名士が訪れたものだ。*Things Japauese* の著者チエンバレン氏，一高時代からのドイツの友人ユンケル氏，神戸のクロニクル社の主筆ロバート・ヤング氏，京城のソールプレス

の主筆時代の山県五十雄氏等が，遠路わざわざ彼を訪問したことがある。近くの鹿児島市からは，多数の名士が度々マードックの庵に姿を見せたが，中でも異色ある訪問者は，パリから帰国後らい療養所を創設して有名になった岩下壮一氏であった。彼は当時七高の英文学教授で稀れに見る語学者であった。不自由な足を引摺りながら，坂道を厭わず，よくマードックを訪れ intellectual conversation を交わした。ギリシヤ語のプラトン全集の中から「国家論」を，マードックの書斎から借り出して読んだほどの学者であった。

最後に彼の著作について一言しておこう。彼が一高在任中に物したいくつかの著作の外，鹿児島に居る頃は，前記ジャパン・クロニクル紙に哲学や日本歴史に関する記事をよく寄稿した。大正3年1月の桜島の大噴火の時はその目撃者として連載記事を同紙に寄せたことがある。マードックが1919年にシドニー大学の東洋学部の主任教授となった時の就任公開講義がパンフレッとして出たが，前記の山県五十雄氏はこの 40 頁位の一文を他の三篇と共に編集して Japan's Position in the Far East という標題で，註つきの大学向けの教科書として大正 13 年に研究社から発行している。

しかし彼の大著は何といっても *A History of Japan* である。マードックの死後ロンドンの本屋から三巻一揃として出版されたものを見ただけでは分らないが，実は最初に世に出たのは第2巻，すなわちキリスト教が日本に伝わって来た 16 世期の歴史である。信長・秀吉時代の日本に関する文献としては，当時日本に渡来していたポルトガルやスペインの宣教師達が本国に送った書簡文，いわゆる Jusuit letters が何より貴重とされていた。これらの手紙全部は Satow, Chamberlain の両 Japanologists（日本学者）の好意により，マードックの利用するところとなった。語学に通じた彼はこれら全部の手紙を読破すると共に，ロンドンの British Museum にある日本関係の本，ことに外人の日本旅行記に目を通してこれを外国側

の史料とし，山県五十雄氏が英訳した日本外史その他の日本側の資料を参考にして書き上げて，神戸クロニクル社（後の Japan Chronicle）から自費出版したのが第二巻である。そのまえがきに「若し山県氏の援助がなかったらこの歴史は書けなかったであろう」とその help を多とし表紙に In collaboration with Isoh Yamagata として出した。山県氏はたちまち日本研究家に歴史家として知られるようになった。山県氏はさかんに広告や宣伝の必要を説いたが，マードックは Good wine needs no bush（良酒は看板を必要としない）といってすすめを退けた。しかしやがてこの歴史の真価は世の認めるところとなり，好評を博するに至った。マードックが一高在学中に，東大で工学の講義をしていたバートン（Burton）という技師の写真をもとに書き下した *Ayama-san* という小説を，Burton のすばらしい写真をけがす trash だと酷評したハーン（Lafcadio Hearn）ですら，自分が *Japan—An Interpretation* を書き上げたとき，このマードックの宗教的偏見の少しもない remarkable book を参考し得なかったのは心残りがすると，同書の巻末に書き添えているほどだった。第二巻の成功に元気づいたマードックは神代から 16 世期までを第一巻として書き上げるに必要な日本文献を読む力をつけようと決意した。彼はすでに 50 に近い歳だったので，今から日本語を読む稽古をするのは遅すぎると心配する向きも多かったが，マードックはローマの Cato は 80 歳でギリシヤ語を学んだといってがんばった。博覧強記の彼は遂に自力で第一巻を書き上げた。AsiaticSociety of Japan（アジア協会）が出版を引受け，印刷したのは第二巻と同じく Japan Chronicle 社であった。引続き徳川時代に掛り，第一次世界戦争が勃発した 1913 年以前にすでに書き終っていたが，色々の都合で出版の運びに至らなかった。マードックは原稿を携えたまま，1919 年にシドニー大学の東洋学部主任となって渡豪してしまった。もっともその一部は第一次世界戦争，中日本で発行されたイギリスの宣伝雑誌 The New

East（日英両国語）にマードックの未発表第三巻からとして掲載され，全部の刊行が待たれていた，マードックが 65 歳を一期としてシドニー郊外で永眠したので，原稿は遺稿として残り，遺言執行人の計いでロンドンの出版会社に送られ第三巻となって世に出たわけだが，日本通の英人が適当に編集したため，索引などは，山県氏の手になる第二巻と第一巻のそれに較べて，ほとんど役に立たないといっても過言でないほどお粗末きわまるものである。巻末に添えられた参考書のリストの如きもいいかげんのもので世の誤解を招いた。幸いマードック直筆の bibliographical note が何かの間違いで私の手もとに残っていたので，外国語学校（今の外語大学）の Medley 氏に依頼して，アジア協会の Transactions の Second Series Volume V に To be appended to Murdoch's History of Japan Vol III として掲載して貰った。しかし明治時代史は遂に世に出ないで，原案の四巻物の日本史は一種の political history of Japan の fragment となってしまった。その後新しい史料が続々世に現われて Sir George Sansom の A Cultural History of Japan（文化史）や同氏の 3 巻物 History of Japan などが次から次へと世に出るに及んで，マードックの名は日本ことに日本史を研究する外国人の間にも余り知られないようになった。しかしマードックの日本歴史は外国人が著した最初の standard history として永く残るであろう。